

〔研究ノート〕

金日成と資源配分の効率性

黒 坂 真

要旨

本論は、金日成の著作を資源配分上の効率性という観点から解釈する。金日成の著作については、当初のものではソ連に対する賛辞が頻出していたがその後無くなったこと、最高権力者の金日成だけができる北朝鮮社会の批判があるから、実態を知る手がかりになること、体制の問題点を下部に転嫁する役割を果たしていること、北朝鮮社会の一種の經典になっているなどの指摘がこれまでなされている。本稿は金日成の教示として頻出する語や著作集に掲載されている法令を読み込んで、北朝鮮社会の実態を資源配分上の効率性という視点から考える。北朝鮮経済の停滞の重要な要因は、金日成に対して意見具申して労働生産性の向上をはかることができないこと、相対的に稀少な資本の輸入を外資による直接投資の許容により実施し、相対的に豊富な労働を多く用いた財の生産に資源を集中するという途上国の条件を生かした経済政策が実施できなかったこと、親日派や地主の粛清と追放は人的資源の損失であること、不満表明の禁止による労働生産性向上への誘因低下などである。

Abstract

The purpose of this paper is to analyze Kim Il Sung's Works and papers in light of efficiency of resource allocation. Our conclusion is that one of major factors of economic stagnation in North Korean Economy is the ruling system, where people have to obey all the orders shown by Kim Il Sung. People find it difficult to raise a new method for improving labor productivity since it may break the orders shown by Kim Il Sung. Kim Il Sung did not perform an economic policy that utilizes relatively abundant labor. He did not allow direct investment from the western world for a long time in spite of the fact that capital is scarce. That means he ignored comparative advantage of North Korea. Conducting a purge of disloyal persons, landowners, and pro-Japanese elements implies a loss of valuable human resource. Prohibition of freedom of speech led to stagnation of labor productivity.

キーワード：金日成 ソ連 資源配分 効率性 労働生産性

I 本論の課題と構成

本論の課題は、金日成の著作を資源配分上の効率性という観点から解釈することである。北朝鮮社会は極端に閉鎖的であるから、その社会経済事情と構造を把握することは極めて困難である。北朝鮮当局が公表する文献としては「労働新聞」「民主朝鮮」「朝鮮中央通信」等々があるが、これらは基本的に体制の宣伝を目的としている。金日成の著作も同様であ

るが、当局が体制をどのように宣伝しようとしているか、あるいは体制をどのように把握しているかを金日成の著作により把握できる。

金日成の著作をどのように読むかという問題についての代表的文献としては、金炳魯(1993)、ソ・デスク(2001)、ジョン・ミヨン(2001)、リュウ・キルジェ(2003)、イ・ジュ Chol(2003)がある。Ⅱで、本論との関係でこれらの中から注目すべき点を取り上げて紹介する。Ⅲで、金日成著作集の中のいくつかの論考を取り上げ、それらから明らかになる北朝鮮の社会経済の特徴について論じる。Ⅳで本論をまとめ、今後の課題を述べる。

Ⅱ 金日成の著作をどう読むか—既存研究から

金炳魯(1993)は93年までの金日成の著作全体を概観し、第二章で金日成の著作の版別の修正内容と特徴を要約している。P15で、解放直後に金日成の名義で出された本や「朝鮮中央年鑑」などと「金日成選集第1巻」を比較すると、ソ連に対する賛辞が挿入されていることを指摘している。北朝鮮は8.15解放を連合国の勝利と評価していたが、ソ連の決定的役割を再評価するようになったのはおおむね1947年ないしは1948年に入ってからである(p15)。

ソ・デスク(2001)は、金日成選集は次のように6回も出されていることを指摘する(p20-34)。これは「金日成選集」(三一書房, 1952金日成選集刊行委員会), 「金日成選集」(初版4巻, 1953-54, 平壤, 朝鮮労働党出版社), 「金日成選集」(再版6巻, 1960-64, 平壤, 朝鮮労働党出版社), 「金日成著作選集」(10巻, 1967-93, 平壤, 朝鮮労働党出版社), 「金日成著作集」(47巻, 1979-97, 平壤, 朝鮮労働党出版社), 「金日成全集」(28巻, 1992-99, 平壤, 朝鮮労働党出版社)である。その他に中国語, 英語, ロシア語に翻訳されているものがある。「金日成著作集」には後から修正したものや捏造したものが多いから, これの歴史的価値は殆どない(2001, p31-32)。「金日成著作集」に掲載されている文献の中で, 「金日成選集」初版に掲載されているものは一つしかない(p31)。これは1945年12月17日に金日成が朝鮮共産党北朝鮮北局第三次拡大会議で行った報告であるが, この報告文も「金日成著作集」に掲載されるまで何度も修正され削除, 加筆をされている。「金日成著作集」では, 金日成のバルチザン運動当時のものという文献を捏造して紹介し, 金日成こそ朝鮮の解放者であり, ソ連が解放当時果たした役割を削除している(p32)。また「金日成著作集」では朝鮮戦争における中国の役割についての言及を避けている。全体として, 「金日成著作集」や全集には捏造と加筆, 削除されたものがあまりにも多く, 原本であるかどうか, 真偽を知ることすら難しい(p72)。金日成の文献を集めた本について言うなら, 「金日成著作選集」に掲載されているものが最も信憑性が高い(p72)。解放後, 朝鮮戦争までの1953年までに出版された初版「金日成選集」に掲載されているものは原本と言える。

リュウ・キルジェ(2003)は, 北朝鮮研究の最も困難な点として, 北朝鮮当局が出した公刊文献以外には事実上使える資料がないことを指摘する(p46)。「労働新聞」など北朝鮮の公刊文献は現実をそのまま表したのではなく, 体制を正当化するという観点から脚

色された内容があると見るべきである (p47)。しかし、公刊文献には住民に伝えようとする政策の動向と性格、住民に対して体制の正当性を確保できる論理が内在している (p47)。そこで公刊文献には誇張や隠蔽があらうと、ある程度はデータがあるとみなせる (p47)。脱北者の証言については、部分的な事実に対する情報であり印象的な内容であるが、全体的な輪郭を描くときに助けにはなる (p49)。脱北者の証言を有効なものとするためには、文献資料や他の人の証言で再確認する必要がある (p49)。金日成、金正日の文献の特徴としては、1967年に「唯一思想体系」が確立されて以降、北朝鮮の全ての文献は金日成の教示を引用していることがあげられる (p63)。金日成の教示は、誰も疑問提起や批判をできない絶対的で自明の公理になっている (p63)。金日成と金正日は最高統治権者であり、他の何よりも彼らの絶対的な権力で北朝鮮の体制を動かしているという特徴から、彼らの文献の価値は高いといえる (p49)。

イ・ジュチョル (2003) は、この数年間で北朝鮮の体制をよりよく理解することができた最も重要な要素として、北朝鮮を離脱した住民数の増加と南北交流の増大をあげている。脱北者の持つ情報量は、各個人の経歴と経験により違いが大きい。しかし脱北者の情報を蓄積することは、北朝鮮の体制全般を理解するために大きな役割を果たす (p116)。脱北者情報を活用した情報の確認と補充の実施、北朝鮮資料の信頼性に対する資料検討は北朝鮮研究に大いなる助けとなる (p117)。金日成の著作には、最高権力者である金日成だけができる北朝鮮社会に対する批判があるという点で重要である。特に、金日成が朝鮮労働党と政務院の最高幹部を集めて教示した各種の批判は、北朝鮮社会の実情を理解するために助けとなる (p130)。金日成、金正日の著作は北朝鮮の体制の問題点を下部の働き手に転嫁するという点で重要な役割を果たしている。下部の働き手に全ての責任を押し付け批判するという、北朝鮮の政治の一面を我々は金日成や金正日の著作を通じて見ることができる (p135)。黄長ヨップは金日成、金正日ともに一行も文書を書いていないと述べた。金日成、金正日の著作の中に、彼らの思考が最もよく表れている部分を探し出し解釈する作業が必要なのである (p136)。

ジョン・ミヨン (2001) は、社会主義社会ではイデオロギーの解釈権は党にあることは常識であるが、北朝鮮社会ではそれを金日成が独占していることを指摘する (p35)。従って北朝鮮の学者の研究は金日成の思想に対する解釈という範囲を超えられない (p35)。北朝鮮では「金日成著作選集」「金日成著作集」は一種の經典になっている (p37)。

これまでの主な業績から明らかなことは、金日成の著作には修正、削除、加筆されたものが多いこと、誇張や虚偽もあるから、そのまま金日成の著作の記述を北朝鮮の真実としてみなすべきではないということだ。金日成の著作の記述を、脱北者の証言や他の北朝鮮の公刊文献と照らし合わせて北朝鮮の現実を考えていかねばならない。次に、金日成の著作からいくつかの論考を取り上げて、北朝鮮社会の実態について論じる。

Ⅲ 金日成の著作と北朝鮮

(3-1) スターリンとソ連礼賛の削除

私の手元には1952年刊行の「金日成選集第一巻、第二巻」と1966年刊行の「金日成二巻選集」、1980年から99年まで刊行の「金日成著作集」、韓国語の「金日成著作集」第43巻がある。以下、これらにより金日成の著作をどう見るかという問題を考えよう¹⁾。

まず金(1993, p15)が指摘している8・15解放の評価の変遷である。北朝鮮は8・15解放を当初、連合国の勝利と評価し、ソ連の決定的役割を再評価したのは1947、48年頃であるという点は、1952年本に掲載されている「二十ヵ条政綱について」(1946・3・23)で確認できる。この論考で金日成は最後に、「日本の圧迫から朝鮮人民を解放した連合国万歳！」と述べている。1966本及び1980年刊行の「著作集2」では、この部分は削除されている。ソ連の評価の変遷について少し見ておこう。52年本(p5-10)に掲載されている「三・一革命運動二七周年のために」(1946・3・1)では、「わが民族の当面する任務」の6として、「ソヴェト軍隊、ソヴェト人民との有機的な、親密な関係を持たなければならない。ソヴェト軍隊は、われわれがもっとも信頼しうる親密な友である。わが民族は、このような偉大な民族との友好と親善関係をもたねばならないのだ」(p9)、「世界人民の偉大な指導者であり、恩人であるスターリン万歳！」(p10)と述べている。この論考は66年本には掲載されていないが、「著作集」には掲載されている。「著作集」掲載論考で金日成は歴史的な課題の第六として「ソ連人民との友好関係を強化すべきであります。ソ連人民は朝鮮人民のもっとも信頼すべき友であります。したがってソ連人民との友好関係を強化するために全力を尽くすべきであります」と述べている。「スターリン万歳！」という記述はない。52年本に掲載されている「土地改革について」(1946・4・13)は、66年本と「著作集」には掲載されていない。52年本の「土地改革について」は、金日成が行った1946年4月13日の北朝鮮臨時人民委員会第一次拡大委員会で「土地改革の総括報告にたいする結論の要旨」とされている。66年本及び「著作集」では、「土地改革の総括と今後の課題」という論考が掲載されているが、これは1946年4月10日に北朝鮮共産党中央組織委員会第六回拡大執行委員会で行った報告となっている。52年本では、成功的に土地改革をなしとげた原因としてはじめに、「北朝鮮には、人民がもっとも敬愛し、人民の民主主義と自由をぜったいに尊重するソヴェト軍が進駐したことによって、朝鮮人民に民主主義的發展の可能性と条件があたえられた」(52年本p18)ことをあげている。また、「人民委員会内にいまだのこっている無能で腐敗した貪官、汚吏、官僚主義者、命令主義者、反民主主義的反動分子どもを整理・粛清しなければならない」(52年本p22)と述べている。この時期に、ソ連と金日成らにより「地主」「反動」とみなされた人々に対して相当な弾圧がなされたことを示唆する記述である。52年本の「メーデー記念演説」(1946・5・1)は66年本には掲載されていない。「著作集」には「メーデーに際し朝鮮の同胞に告ぐ」(1946年5月1日)という論

1) 以下、表記簡便化のため52年本、66年本、「著作集」と表記する。

考が掲載されているが、52年本とかなり異なったものになっている。52年本では、金日成はソヴェト軍隊の第二次大戦での役割を長々と説明しているが、「著作集」にはそんな記述はない。52年本で金日成は「わが朝鮮の解放が、平和を愛好し、国際ファシストの野じゅう的な侵略から世界の人民を救ったソ同盟を先頭とする民主主義陣営の勝利によって達成されたものだからである」(p41)、「世界民主主義の偉大な指導者スターリン大元帥万歳！」(p43)と述べているが、このようなソ連を絶賛するような記述は「著作集」にはない。

52年本、66年本には掲載されていないが、「著作集」に新たに掲載されている論考も多数ある。例えば「わが党の歩んだ道と当面のいくつかの課題について」(1946年4月20日)や、「ハムギョン北道人民政権機関の当面の課題について」(1946年4月21日)、「すぐれた軍事・政治幹部となれ」(1946年4月29日)、「女性同盟の今後の課題について」(1946年5月9日)等々である。勿論、52年本や66年本に掲載されていないからと言って直ちにこれらが捏造であるとは論証できない。

「解放」直後の金日成の著作を読めば、ソ連礼賛がその後削除されていったことが簡単にわかる。これは、北朝鮮が徐々にソ連から自立していったことを意味している。ソ・デスクが指摘しているように、相当な改ざん、加筆がなされている「金日成著作集」は歴史の資料としては殆ど価値がないといえよう。しかし改ざんや加筆は北朝鮮当局によりなされているのだから、北朝鮮当局がどのように体制を正当化し宣伝しようとしているか、あるいは金日成や金正日そして彼らの意を受けた労働党の宣伝担当幹部が北朝鮮の体制の問題点をどのように認識し、下部に責任を転嫁しようとしていたかを検討するための資料として用いることはできる。以下では、「金日成著作集」を手掛かりにしてこれを検討しよう。

(3-2) 金日成の北朝鮮社会把握と現実

(その1)「発展」「解決」と財の不足について

金日成の著作を多少読むと、頻繁に出てくる記述は、「○○産業を発展させろ」「○○の問題を解決せよ」というものである。例として66年本掲載の「第一次五か年計画を成功裏に達成するために——朝鮮労働党第一回代表者会議での結語——」(1958年3月6日、66年本p397-433)からこれを見よう²⁾。

金日成によれば、「五か年計画の中心課題は、わが国における社会主義的工業化の土台をきずき、人民の衣食住問題を基本的に解決すること」である(p400)。「自主的で、自立的な経済を建設する」ための経済的土台としては、近代的技術で装備された重工業と軽工業がなければならない(p401)。重工業を優先させながら、同時に軽工業と農業を発展させるという方針をひきつづきしっかりまもらねばならない(p403)。同時に、財政政策と投資の面で、経済建設と人民生活の問題を合理的に解決することが大切である(p404)。蓄積と消費の均衡を正しくさだめ、これを維持しなければならない(p404)。さらに金日

2) 「著作集」12, p97-128 にも掲載されている。

成は人民生活を向上させるうえで、都市と農村の差異をなくことを主張する (p405)。重工業を優先的に発展させるために金日成は、第一に鉄鋼業、第二に石炭と電力の生産を発展させることを主張している (p406-407)。衣食住の問題として金日成は化学繊維で繊維問題を解決すること、肥料と薬品をたくさん生産することを主張している。重工業の問題として、鋳業と非鉄金属工業を発展させ、外貨獲得を主張している (p409)。住宅問題を解決するため、建材工業、セメントの生産を増大させねばならない (p409)。セメントさえあれば、農業もひじょうにたやすくやれる (p409)。製鉄工業やその他の工業でも、原料を自力で解決できる工業部門を発展させなければならない (p411)。これらすべての問題を解決するうえで、もっとも重要なことは、機械工業の発展である (p411)。国民経済各部門の発展のために、もっとも重要なのは、機械工業である (p411)。つぎに重要なことは、食品加工業である。わが国では、食品加工業がもっともたちおくらしている (p412)。わが国の重工業部門でも、それぞれの工場から出る副産物で、日用品を生産すべきである (p413)。生産協同組合、地方工業、軽工業などの各部門で、日用品を大量に生産しなければならない (p413)。農業では、穀物生産を優先させながら、同時に、工芸作物と畜産、果樹栽培を発展させるよう努力しなければならない (p414)。社会主義的商業で重要なことは、人民に商品を正しく分配し、供給することである。われわれの生産が計画的であるだけに、分配や消費も計画的におこなわなければならない。商業機関が、このような任務をじゅうぶんに遂行しているかという点、そうではない (p419)。はなれたところの人は、当然まわってくるはずの商品も受けとれないでいる。これは、商業部門の活動家が、自分の任務をはたしていないことをものがたっている (p420)。

上述のように金日成が「発展させよ」「解決せよ」と主張する産業はいくつもある。この件について、資源配分の効率性という観点から考えてみたい

第一に、原材料や資材入手上の競合という問題である。ある財をより多く生産するためにはより多くの資材や原材料、労働力あるいは新しい機械が必要であるが、それらを入手して「発展」「解決」せねばならない産業や工場がいくつもあるとき、社会主義計画経済では誰がどのような基準で優先順位を決めるのだろうか。重工業が優先であると金日成は述べているが、重工業の工場間でも資材や原材料の入手順位で競合することはありうる。金日成は鋼材不足解決のためには鉄鋼業を発展させて、わが国に必要な鋼材を解決せよと述べ、この部門ではたらく党員、労働者、技師、支配人、その他管理に携わる同志は努力せよ、と述べているが、鋼材の大増産のために必要な電力や機械が他の重工業部門に配分されて確保できないこともありうる。「努力」のしようがないとき、労働党幹部や支配人の責任になるのだろうか。はなれたところの人が、当然まわってくるはずの商品を受け取れないのは、重工業部門でそれぞれの工場から出る副産物を「日用品」の名目で確保してしまっているからかもしれない。あるいは物資の輸送に必要な鉄道や道路ができていないからかもしれない。目標達成のために労働をより多く動員すれば、労働者に大きな負担を強いることになるが、時間外労働の賃金をもらっても国営商店に商品がないなら、労働者は事実上無償ないしは極めて低い賃金で労働を提供しているようなものである。

第二に、資本の稀少性と労働の相対的豊富、それぞれの限界生産性についての不認識である。市場経済であれば、稀少な資源の配分は基本的に価格の変動により調整され、多くの人々がより多く求めている財やサービスがより多く供給されるようになっていく。途上国では一般に、機械が不足しているから工業は未発達であるが、労働は豊富に存在しているから賃金が安いので、外国の企業が投資をして工場を作れば多くの利益を得ることができる。一般に途上国では資本が稀少だから、資本の限界生産物が大きいのである。従って北朝鮮でも、外国からの投資を受け入れて重工業化をはかるという経済発展戦略はあったはずだが、著作から見る限りこの時期の金日成にはそんな発想は皆無であった。また社会主義計画経済の特徴である財の不足が北朝鮮にも存在してきたことは、上述の金日成の著作からも明らかである。金日成はこれをもっぱら下部の責任に転嫁している。

（その3）労働法令と実際の労働現場について

52年本（p51-63）、66年本（p29-42）及び「著作集」2（p246-257）には、「労働法令について」「労働法令草案について」という論考が掲載されている。これらの論考でも、ソ連の役割は時間の経過とともに矮小化されている。「ソ連が朝鮮を解放した」「偉大な指導者、スターリン元帥」という類の記述は「著作集」にはない。また「著作集」には、「北朝鮮の労働者、事務員にたいする労働法令」（1946年6月24日）が掲載されているが、法令は金日成の著作なのだろうか。

労働法令を見ると、すべての労働者や事務員は原則として8時間労働で、時間外労働は250時間を越えてはならず、時間外賃金として基本賃金定額の1.5倍が支払われること、年に一回二週間の定期休暇を与えられるなどの記述がある。これだけ見ると一般の労働者には良いことばかりのような気がするが、賃金を受け取っても商品が国営商店で商品が不足して購入できなかったらどうなるのだろうか。「〇〇問題を解決せよ」という金日成の指令、教示が降った場合、賃金や休暇を労働法令どおりに実行していたら増産ができず、問題が解決できない場合もありうるだろう。その時に労働者は法令通りに賃金や休暇を要求することができるのだろうか。第23条には労働争議の問題は企業主と職業同盟の間で解決する、その間で合意に達しないときは人民裁判所がその労働紛争にたいする最終的解決を行う旨規定されているが、企業主、職業同盟、そして人民裁判所の人事権を朝鮮労働党が掌握していたら、労働者は企業主あるいは朝鮮労働党幹部に対して不服を唱えることができなくなる。金日成の著作を読んでいくと、北朝鮮の労働現場で、普通の労働者が何かの問題で金日成や朝鮮労働党幹部に抗議することは極めて困難だったのではないだろうかと考えられる。

「労働法令について」が出された1946年頃に北朝鮮では「土地改革」という名目で「親日派」「民族反逆者」「地主」というレッテルを貼られた人々から土地を取り上げ、追い出してしまふ粛清活動が行われた。52年本（p18）によれば、「人民はみずからの手で、人民を愛し人民の利益をはかる指導者を人民委員会に選び、親日派、反動分子どもを粛清する活動を展開した」とある。金日成は人民委員会の当面の任務の第三番目で、「人民委員会

内にいまだのこっている無能で腐敗した貪官，汚吏，官僚主義者，命令主義者，反民主主義的反動分子どもを整理・粛清しなければならない」と述べている。あるいは「労働法令について」（52年本，p62）で金日成は次のようにはっきりと述べている。「労働法令に反対するものは，朝鮮の売国＝民族弑逆者金九，李承晩一味と，朝鮮をふたたび植民地化そうとたくらんでいる帝国主義者どもであることを，われわれ朝鮮人民ははっきりと認識しなければならない」³⁾。

何らかの名目で粛清された人々の姿はその後どうなったのだろうか。「反動分子」のその後の運命を，粛清を免れた人々は見えていただろうから，普通の労働者が何かの問題で金日成や朝鮮労働党幹部に抗議することは極めて困難だったと考えられる。金日成の著作を素直に読めば北朝鮮の労働現場では，この時期から普通の労働者が労働党幹部や役人に，労働法令と目標達成の間の矛盾や，生産増大運動の問題点を指摘すると「朝鮮をふたたび植民地化そうとたくらんでいる帝国主義者」「反動分子」とみなされ，粛清されてしまうことになる。萩原（1993，p119）によれば，進駐してきたソ連軍は，北朝鮮に自分たちの制度をそのままもってきた。秘密警察がすぐにつくられ，密告が奨励された。ささいな言動で驚くべき数の国民が逮捕された。木村（1999，p38）は，地主の追放が企てられたのは農村における従来の権力構造の破壊，共産党の支配の確立という目的があった旨述べている。

密告による逮捕が頻発しているようでは，人々は落ち着いて働くことができない。生産効率を上げて労働生産性を上昇させるという誘因を持ちようがない。資源配分の効率性という観点から「反動分子」「親日派」「地主」の粛清を考えると，金日成と朝鮮労働党は経済発展の必要な人的資源の損失ということになる。

（その4）税金制度の完全な廃止について

「著作集」29（p147-153）に，「税金制度の完全な廃止について——朝鮮民主主義人民共和国最高会議法令，最高人民会議第五期第三回会議で採択」（1974年3月21日）が掲載されている。法令が金日成の著作とみなされているのは奇妙であるが，とにかくこの法令によれば「わが国は世界で初の無税国となった」（p149-150）とある。「税金制度の完全な廃止は，偉大なチュチェ思想の輝かしい勝利」とある（p152）が，税金がない国家とは存続可能だろうか。p150で「革命と建設に必要な資金を社会主義経営からの収入によって保障できる」とあるから，法人税に該当する税は存在することになる。北朝鮮ではすべての国民はどこかの国有企業や行政組織，労働党関連団体ないしは管理所という政治犯収容所に所属し，そこで配給や賃金を受け取ることになっている。全ての合法組織は「社会主義経営」になっているともいえる。他国では，賃金から所得税がいくらか支払われており，納税額は国民それぞれに明示されているが，北朝鮮では所得税を「なくした」ということにして各人の納税額を不明にし，納税分をすべて「社会主義経営からの収入」に配分

3) 66年本と「著作集」にはなぜか金九の記述はない。

したというだけのことではないだろうか。ある意味では、所得税や住民税をなくしてその分を全額法人税に回し、法人税を「社会主義経営からの収入」と言い換えただけのことである。この徴税手法を、金日成著作集に掲載されているから金日成が考案したとは論証できないが、北朝鮮当局の住民統治手法はこうした詐欺的なものだということである。詐欺的な徴税手法に不満を持つ住民もいるかもしれないが、不満を口に出せば「反動分子」とされてしまうから、黙っているしかない。各企業、各職場を統制している支配人や労働党幹部が国家に対する各人の貢献度を判断し、各人の昇進や配置を決定するから、一般の住民、労働者は彼らに逆らえない。労働党幹部になれば商品が比較的豊富に並べられている店で買い物をすることができるから、住民は時には賄賂を出して昇進やより良い配置を得ようとする。金乙星「アボジの履歴書」(1997, 第二部 p19)によれば、北朝鮮にはすでに50年代後半から労働党や政府機関の幹部など地位の高い人と一般労働者、庶民の差は歴然としていた。幹部は高級車に乗り、幹部用の住宅や病院、商店があった。配給の米も幹部は白米が殆どで下になるほど雑穀が大部分だったという。

「税がない」という建前と、北朝鮮社会の現実が大きく乖離しているのである。資源配分の効率性という観点から「税金制度の完全な廃止」という虚偽宣伝と体制への不満表明禁止制度を見ると、虚偽宣伝に必要な資源の浪費、不満表明禁止によりさらに不満が労働者と住民に蓄積し、生産性向上への誘因が低下するといえる。

IV まとめと今後の課題

本論は、金日成の著作の読み方について検討し、それらを資源配分上の効率性という観点から解釈するという視点を提示した。私見では、このような視点で金日成の著作を解釈した文献は少ない。北朝鮮の体制を考察するためには宣伝物としての公式文献のほかに、脱北者が伝える北朝鮮の内部事情も重要な資料である。我々としては脱北者や朝鮮総連関係者、拉致された韓国人らがもたらす情報と、公式文献の中身を照合していく中で、北朝鮮の社会経済事情と構造が徐々に解明していくしかない。勿論、脱北者らの証言の中には思い違いや誤解、記憶の曖昧化などの問題も起こりうるが、これらについては証言を一つ一つ確認して解明していくしかない。統一研究院の「北朝鮮人権白書」(2012)は、このような手法を採用している。我々は北朝鮮経済停滞の重要な要因として、金日成や金正日に対して意見具申をして労働生産性の向上をはかることができないこと、資本は稀少であるが、相対的に豊富な労働の利用という条件を生かした経済政策が実施できなかったこと、親日派や地主の粛清と追放は人的資源の損失であること、体制への不満表明の禁止による労働生産性向上への誘因低下などをあげた。

「著作集」にはこのほかに、北朝鮮の社会経済に大きな影響を与えたと考えられるいわゆる「農村テーゼ」「教育テーゼ」や、朝鮮総連に対する指令などが掲載されている。これらを資源配分の効率性という視点からどう読んでいくかということについては、今後の課題としたい。

参 考 文 献

日本語

- (1) 木村光彦(1999)「北朝鮮の経済 起源・形成・崩壊」(創文社)
- (2) 金乙星(1997)「アボジの履歴書」(財団法人神戸青年学生センター出版部)
- (3) 金日成選集刊行委員会編訳(1952)「金日成選集第一巻 八・一五解放以後の時期」三一書房
- (4) 金日成選集刊行委員会編訳(1952)「金日成選集第二巻 祖国解放戦争の時期」, 三一書房
- (5) 金日成著作集(1980-99) 1-42, 44, 朝鮮・平壤 外国文出版社
- (6) 日本共産党中央委員会金日成選集翻訳委員会訳(1966)「金日成二巻選集」, 日本共産党中央委員会出版発行
- (7) 萩原遼(1993)「朝鮮戦争 金日成とマッカーサーの陰謀」(文藝春秋)

韓国語参考文献

- (1) 金炳魯(1993)“金日成著作解題”, 民族統一研究院
- (2) 김일성(1996)“김일성저작집43”, 朝鮮労働党出版社(金日成著作集43)
- (3) 류길재(2003)“김일성·김정일의 문헌을 어떻게 읽을 것인가”, 경남대학원 엮음, 북한연구방법론, 제2장, pp 46-70, 서울;한울 아카데미(リュウ・キルジェ, 金日成・金正日の文献をどう読むか)
- (4) 서대숙(2001)“김일성의 저작문헌”, 한국정신문화연구원 편, 북한현대사 문헌연구, 총론, pp 15-73, 백산서당(ソ・デスク, 金日成の著作文献)
- (5) 이주철(2003)“북한연구를 위한 문헌자료의 활용”, 경남대학원 엮음, 북한연구방법론, 제4장, pp 116-146, 서울;한울 아카데미(イ・ジュチュル, 北韓研究のための文献資料活用)
- (6) 전미양(2001)“김일성의 말, 그 대중설득의 전략”, 책세상(ジョン・ミヨン, 金日成の言葉, その大衆説得の術)
- (7) 통일연구원(2012)“북한인권백서”(民族統一研究院, 北韓人權白書)